

劇作家としてのロバート・グリーン ―生活困窮と作家の自負―

丹羽 佐紀

はじめに

16 世の作家ロバート・グリーン『グリーンの一文の知恵』(*Greene's Groats-Worth of Wit*, 1592) は、主人公ロベルトを通して実際にはグリーン自身の事を描いている。グリーンは当時、様々なジャンルを手がけた職業作家であったが、彼が最後に『グリーンの一文の知恵』で言及したのは、成り上がり者の劇作家への揶揄であった。¹ この劇作家については、シェイクスピアのことを指しているとする説が有力であるが、瞬く間に観客の人気を博して成功していく新進の劇作家は、グリーンにとってそんなに目障りな存在だったのだろうか。本稿では、その成り上がり者に後年、自ら手がけた散文作品『パンドスト王』(*Pandosto*, 1588) を材源として利用されてしまうグリーンの作家としての自負を、特に当時の劇作家の仕事と彼の困窮ぶりと関連に焦点を当てながら読み取る。

最初に、グリーンの実際の窮乏が、当時の劇作家の仕事や上演・出版をめぐる社会的事情とどのように関連しているのか分析する。彼は 1592 年、貧困のどん底のうちに孤独な死を遂げた。そこでグリーン最期について、彼を取り巻く周囲の人々の反応を、いくつかの文献を参照しながら確認していく。次に、同じく 1592 年の劇上演による興行収益と、当時の劇作家の報酬に関する資料をもとに、劇作家としてのグリーンと、パンフレット作家としてのグリーンの違いについて考察する。さらに、彼の作品は彼が亡くなった後も発表され続け、先述したように散文作品『パンドスト王』がシェイクスピアの劇作品『冬物語』の材源として使われる等、その影響は 1592 年以降も続いた。そこで、グリーンが生前だけでなく没後も含め、劇作家としてどのような仕事をしたと言えるのか、『グリーンの一文の知恵』における表現を中心に取り上げながら考察する。この作品で繰り返し言及される放蕩と困窮のトピックは、『愚か事よさらば』(*Greenes Farewell to Folly*, 1591) をはじめとするグリーン後年のいわゆる懺悔ものシリーズや、cony-catching pamphlets と呼ばれるパンフレットものにもしばしば取り上げられている。役者や劇団との関係、晩年のシェイクスピアとの羽ぶりの違いなど、困窮に身を置いたグリーンが劇上演に果たした役割を読み解いていく上で、『グリーンの一文の知恵』は、重要な手がかりになると言える。

一方では、出版文化という時代の新しい流れに乗り、見えざる読者を相手に直接アピールするパンフレットものの流行に先駆けた多才な作家グリーンがいる。他方で、『グリーンの一文の知恵』において、筋を脚色し化粧の上塗りで成功を収める役者や、「成り上がりものの鳥」(‘an upstart crow’) にクレームをつけることにより、はからずも新進劇作家へのライバル意識や苛立ちを吐露した彼の別の側面が見える。(Greene, 40) さらに『グリーンの一文の知恵』からは、当時の役者たちと劇作家の微妙な関係も透けて見える。多くのジャンルで執筆に奔走しながらも困窮状態にあったグリーン、単なるボ

ヘミアンとは異なる作家としてのこだわりを、劇作家の仕事という視点から捉えてみたい。

1. 作家グリーンの窮乏生活をめぐって

本章では、グリーンの実生活について彼を取り巻く人々が繰り広げた論戦から、その作家生活と困窮の関係について考察する。Kinney によれば、グリーンはそもそも自分が放蕩で悪名高いことにはまんざらでもなかったとされる。

Greene did not dislike such notoriety. He wore a very long, pointed red beard, drank himself into debt and amusingly outfaced his creditors, and tossed off another popular pamphlet whenever his debts got oppressive. (80)

彼はむろんプロの作家であり、Melnikoff と Gieskes が指摘するように、その仕事は常に、作品の向こうにある消費者としての読者を意識し、売れることをまず大前提の目標とするものであった。(13) しかも彼はケンブリッジ大学とオックスフォード大学で学位をとったユニヴァーシティ・ウィッツの一人であり、お墨付きのブランドのように自分でそれを様々な作品の巻頭言に示している。このように学位をかざすグリーン態度について、同じく Melnikoff と Gieskes は、グリーンは常々、「自分の大学出の地位を誇示しつつ同時にそれを否定する」というまさにその行為において、「自らの職業作家としてのイメージ」を打ち出したと位置づけている。(19) ² 見方によっては、これも商業的な戦略の一側面であったと言えよう。Raymond が「書くスピードが早い才能」(‘his ability . . . to write at speed’) と述べるように、作家としては非常に効率の良い能力を発揮出来るグリーンであってみれば、暮らしに困らない生活を送ることも可能であったに違いない。実際、彼は『ベイコン僧とバンゲイ僧』(*Fiar Bacon and Friar Bungay*, c1589-90) のような、人気を博した劇作品も手がけている。しかし同じく Raymond が指摘するように、グリーンはまぎれもなく「エリザベス時代の放蕩者」(‘an Elizabethan prodigal’)であり、例えば作品を大量に生産し、その儲けを全て蓄えに回すことに満足を覚えるタイプの人間ではなかった。(59)

現実のグリーン最期の様子について後世の人々が得る情報の源は、グリーンとトマス・ナッシュの論敵ゲイブリエル・ハーヴェイの『4つの手紙』(*Four Letters*, 1592)の記述に負うところが大きい。ハーヴェイはこの手紙の中で、グリーンがどのような状況で死を迎えたか詳細に書き残している。ただし Brydges も指摘するように、ハーヴェイの記述には、縄職人である自分の父親の職業をけなされたことに端を発する、私的感情の勢いに拠るところが多い。彼はグリーン放蕩生活と困窮をモラルの欠如と結びつけており、これらの記述を、グリーン作家生活全般を知る客観的証拠として扱うには少々難がある。例えば彼は、『4つの手紙』の4番目の手紙の中で、グリーンやナッシュのことを「時代を掻き回す、最も軽蔑に値する物書き屋」(‘the most contemptible fellowship of the scribbling crew that annoyeth this age’), 「ただの紙の虫、インクパッド、あるいはそれ以下」(‘mere paper bugs, and inkhorn pads, or a great deal worse’)「最良の輩を餌食にし、パトロンの顔に泥を塗り、自分たちの呼吸するところ

ろを汚染する」(‘to prey upon their favourers, to dishonor their patrons, to infect the air where they breathe’)などこきおろしており、その悪態ぶりは枚挙に暇がない。(42-43) ちなみにハーヴェイが触れているグリーンとパトロンとの関係については、確たることはわかっていないが、Wilson は、グリーンが作品を献辞した相手が頻繁に変わっていることから、少なくとも継続して安定した関係を築いたパトロンや献辞者はいなかったのではないかと指摘している。(195)

実際のところ、論敵ハーヴェイがグリーンを攻撃したいちばんの根拠は、死に際の困窮状態にあった。Mentz は次のように指摘する。

A key part of Harvey’s attack on Greene consists in emphasizing his deathbed poverty. Despite being a calling-card for printed fiction, Greene died in debt . . . and this financial crisis loomed large in Harvey’s attack on him. (216)

ケンブリッジ大学で教鞭を取るハーヴェイにとって、放蕩三昧で稼ぎを散財し、結果として人生の最期を一文無しで迎えるグリーンのような人物は、その生き方自体受け入れ難いものであった。しかもそのような人物に自らの父親を侮蔑的に扱われたとなれば、彼の記述に手厳しい表現が並ぶのも無理からぬことであろう。またこれらハーヴェイの論駁で注目すべき点は、彼がグリーン放蕩だけでなく、パンフレットのような単発的な物書きで生業を立てる作家業そのものを見下しているということである。ここには、ハーヴェイ個人の感情だけでなく、当時の作家業がどのように見做されていたのか、とりわけハーヴェイのような階層の人々に、様々な物書きに精を出す作家の仕事がどのようなイメージを持って受けとめられていたのか、その片鱗を伺うことができる。彼らの争いは、ここで終わらなかった。Brydges はハーヴェイの記述に対し、グリーンが彼の不摂生の証しであることは認めているものの、「だからといって不道德であることの証拠とは言えない」、「役者と過ごしたり、道化やバラッド書きになってみたり、愚行を真似たり、馬鹿騒ぎをして飲み食いすることは、別に犯罪ではない」と、ハーヴェイの「忌まわしい復讐」(‘hateful vengeance’)を非難している。(8-9)

His poverty may be a presumptive proof of his impudence; but very inconclusive evidence of his immoralities. . . . To live with players, to be a jester and ballad-writer, to mimic follies, and to set the table in a roar, are no crimes. (9)

Brydges はまた、ナッシュの『4つの手紙への反論 文なしピアスの申し開き』(*Four Letters Confuted: The Apologie of Pierce Penniless*, 1593) から、「彼(グリーン)は悪よりもむしろ徳を受け継いだのだ」(‘He inherited more virtues than vices’)というナッシュのハーヴェイへの反論を引用する。(14)³ ナッシュはさらに、『文なしピアスが悪魔への嘆願』(*Pierce Penillesse his Supplication to the Divelle*, 1592)の中で、「靴直しのからすが「カエサル、万才!」を叫んだだけで、何の報いもなくもっと美しい調べを立ててるすばらしい鳥以上に尊重されてるのは、承服できないところです」(76-77) ⁴と嘆き、グリーン

のように才能ある学者出身の作家が、ろくに新しい服も新調できないような社会的境遇の理不尽さに触れている。

以上のように、グリーンの放蕩と困窮状態が、彼自身の懷具合や最期だけでなく作家業全体のイメージに至るまで、周囲にどのような論駁のきっかけを与えていたか、グリーン、ナッシュ、ハーヴェイのパンフレット論争の記述を通して垣間見ることができる。

2. 劇作家は儲かるのか? ―興行収益の差から考える―

初期近代のロンドンを中心とする劇場で、当時どのような劇作品が人気を博し、どの劇がどれくらい上演で儲けたのかを知る上で、興行主フィリップ・ヘンズロウの日記は重要な手がかりになるとされる。大井はグリーン『ジェームズ4世のロマンス』(*The Scottish History of James the Fourth*, c1590)における解説で、1592年の2月から6月までのストレンジ卿一座によるローズ座での劇上演による興行収入がそれぞれどれくらいあったのか、ヘンズロウの日記をもとに表にまとめている。(208-30) それによると、グリーンが関わったとはっきりわかる劇は『ペイコン僧とバンゲイ僧』4回で収益は合計70シリング9ペンス、『狂えるオーランドー』(*The History of Orlando Furioso*, c1590)1回で16シリング6ペンス、トマス・ロッジとの共作『ロンドンとイングランドにかざす鏡』(*A Looking Glass for London and England*, c1590)4回115シリングの3本、上演延べ回数は計9回となっている。また大井によれば、1592年の2月から6月に関する限り、グリーンが上演回数合計は、ちょうど劇作家として勢力を増しつつあったシェイクスピアの『ヘンリー6世』(*Henry VI*, 1590-1592)1本の上演回数14回よりも少ない。(217) 上演回数だけでなく収益でも、1位がシェイクスピア、2位がトマス・キッド、3位にクリストファー・マーロウと続き、グリーンが収益合計はシェイクスピアのそれとはかなりの差がある。もちろん、グリーンが上演回数及び売り上げともに決して少ないわけではなく、ユニヴァーシティ・ウィッツの一人としての彼の實力を示すものではある。興行収益全体から見れば、グリーンはそれなりに劇上演に貢献したと言える。しかし、キャリアの長さに収益が必ずしも比例しないのは珍しいことでないとは言え、大井もグリーンのことを「シェイクスピアの書きっぷりと人気を、その目でしかと見とどけることができたはず」と指摘するように、シェイクスピア劇との上演人気の差が、劇作家として自分が置かれている現実をグリーンに突きつけたであろうことは想像に難くない。(218)

実際に劇作家が受け取った報酬がどれくらいであったのかについて、Melnikoff はヘンズロウの日記をもとに、一つの作劇に対して受け取る報酬の平均額は6ポンドであったと試算している。(11) また Raymond は、ナッシュが1593年に『エルサレムへのキリストの涙』(*Christs Tears Over Jerusalem*, 1593)の報酬として作品の献辞者から受け取った額が5ポンドであったこと、当時の劇作家が一つの作品につき受け取った額は約5ポンドから8ポンド、さらに追補、改訂などに40シリングほどの追加報酬があったと説明しており、劇1本を仕上げて得られる報酬に比べれば、パンフレットを書く仕事は作家にとって決して魅力的な儲けの源ではなかったと述べている。(58) 例えば、1580年代のパンフレット作家は1作につきせいぜい数ペンス(‘costing no more than a few pennies’)しか貰えなかった。

(Raymond, 8) ちなみに、ベン・ジョンソンが、実際に劇が上演されれば残りの報酬を支払うという約束で書いたプロットには総額の半分 20 シリングが支払われ、後にジャコビアン時代の劇作家ロバート・ダボルンが同様の契約で前払いとして受け取った額は 40 シリングであったとされる。(Stern, 25)

いずれにせよ、このような状況から判断すれば、パンフレットだけを手がけるのは、収入においてどう考えても損である。グリーンは劇作家の仕事も請け負っていたので、これらの事情は当然把握していたであろうし、それぞれの仕事の収入差も気になったに違いない。たとえ上演回数においては新進の作家に太刀打ちできなかったとしても、劇作品をそれなりに集中して手がけることで当たりを狙うことも、選択肢としてはあり得た。しかしそれでもグリーンは、パンフレットものも大量に書き続けており、そもそも Mentz は彼を散文物語 ('prose ficiton') の作家と位置づけている。(219) つまり彼は、劇作品のみを発表し続けるにはあまりにも多才な作家であったのだ。また Melnikoff と Gieskes も指摘するように、グリーンは必ずしも「搾取する印刷業者にこき使われる救いようのない依頼引受人でもなければ、どうしようもなくずさんで書いたものはできるだけ早く片っ端から何でも売る人物というわけでもなかった」。

He was neither a helpless client of predatory printers nor an alternately desperate and sloppy hack selling whatever he could write as fast as he could write it, but rather a shrewd and engaged participant in a rapidly developing cultural market. (13)

グリーンが、もし利益を第一に考えて作品を書くことを優先したのであれば、彼が後年もお多くのパンフレットものを書き続けたことの説明はつきにくい。前章のハーヴェイの記述だけ見れば、放蕩の結果、困窮に喘いで誰にも顧みられず孤独な死を迎えた落ちぶれ作家、というグリーンの惨めな姿だけを想像しがちだが、自分の窮状を売りにして貧乏をネタに作品を書き上げ出版市場へ参入し続けるだけでなく、その作品を通して死後においてもなお後世の作家に影響を与えていった彼のしたたかさには、劇の興行収益や劇作家としての成功度に着目しただけでは見えて来ない、多才な作家としてのグリーンの自負が伺える。

3. 劇作家は儲かるのか? —『グリーンの一文の知恵』から考える—

劇作家としてのグリーンの立場を、前章の興行収益だけでなく彼の作品描写に注目してみると、役者との関係などまた別の側面が見えてくる。特に『グリーンの一文の知恵』では、彼自身を指すと思われる主人公ロベルトが登場し、父親や弟をはじめ彼を取り巻く人物との様々な軋轢に悩みながら、なんとか世間を渡り歩いて行く様子が描かれている。このうち「貧乏兄貴のお見本」('thy threadbare brother')であったはずのロベルトが、ふとしたことから見知らぬ俳優に誘われ芝居を書いてその道に入り込むのと同じように、困窮状態にあるグリーンにとって劇団や役者たちとの仕事は、収入源としてはもちろん、他者との接点の継続性という点で良くも悪くも刺激のある職業であったろう。(6)⁵

『グリーンの一文の知恵』で、弟ルカニオに放り出されたロベルトは、「あなたは学者に見えるが学

者が暮らしに困るなんてけしからん」(‘I suppose you are a scholar, and pity it is men of learning should live in lack’)と親切に声をかけてくれる人物に出会う。(27) その人物は実は俳優で、自分たちは学者のおかげで暮らしを立てているのだと打ち明ける。グリーンと役者や劇団との関係が実際にどうであったかについて確かなことはわかっていないが、ロベルトの「そんな浮いた稼業で繁盛できるとは驚きだ」(‘it is strange that you should so prosper in that vain practice’)という台詞には、グリーンの役者たちへの皮肉もこめられているように読める。(28) Melnikoff と Gieskes は、このような具体的描写から、グリーンが女王一座お抱えの作家として役者たちと共に活動した時期があった、少なくとも役者たちと密接に仕事上の関わりを持った時期があったとしている。(11-12)

当時の劇作品は、ただ一人の作家が単独で推敲を練って完成版シナリオを作り上げるわけではなく、上演に至るまでには様々なジャンルの人の手が随所で入り込んだ。また Bruster は、当時の劇作家たちは、「作品を創り上げる上で、様々な印刷物をあさり、筋や人物、発想や状況、言葉や言い回しなどを絶え間なく探しまわって」そのヒントを得ようとし、見つけて「借用した題材については必ずそれを改変した」と述べている。

Dramatists of this period routinely looked to printed materials in their search for stories, characters, ideas, situations, words, and phrases. Making recourse to a wide range of source materials, they necessarily changed the contexts of what they borrowed. It is through this change of contexts that such authors made the sources more, rather than less, necessary to our understanding of their texts. (176)

これは裏を返せば、既に人々の間で読まれ、出回っている書き物については、著作権や特許など確立されていない時代、どこかで使われる可能性が常にあったということである。グリーンは『グリーンの一文の知恵』において、自分の昔の学者仲間たちに「ああいう猿真似野郎どもには、きみたちの昔の傑作を真似させ、いま賞賛の新案ものは知らさないがいい」「なぜならきみたちみたいにすぐれた才能の持主が、こういう無情な奴どもの思いのままになっているとは遺憾なことだからだ」と警告する。

Oh, that I might intreat your rare wits to be employed in more profitable courses: and let these apes imitate your past excellence, and never more acquaint them with your admired inventions. I know the best husband of you all will never prove an usurer, and the kindest of them all will never prove a kind nurse: yet, whilst you may, seek you better masters; for it is pity men of such rare wits should be subject to the pleasures of such rude grooms. (40-41)

新しく思いついた言い回しは、おそらく後からどこかで容易に借用され、アレンジされてしまうのである。Stern が patch-writer と呼ぶ劇作家たちが、上演のためのシナリオを切り張りのように創り上げていくのは、観客の需要、劇団や俳優の事情に応じた臨機応変さという点で重要な過程であったと考えられるが、このように借用や役者のアレンジが当たり前であった時代の中で、グリーンはどのよう

な立場にあったのであろうか。Stern はナッシュの言葉を紹介し、グリーンがとりわけ自分(ナッシュ)より優れている点として、類まれなる plot-writer であると述べていることを指摘している。(27) つまりグリーンは、劇上演において最も根本的な土台となる「あらすじ」という基盤を、結果的に提供した作家なのだと言える。あらすじはしばしば改変されるため、このような立場はグリーン本人にとっては不本意であったかもしれない、また彼にとって、plot-writer ではなく patch-writer としての才能をフルに発揮したシェイクスピアは、まさに要領のいい「成り上がり者の鳥」であったかもしれない。グリーンは散文物語『パンドスト王』にしても、後にシェイクスピアはそのあらすじを『冬物語』に使用し、しかも大幅な内容変更をしている。とはいえ、Stern はまた、当の作家本人ですら、時には自分の作品を自分で改変し売り渡すこともあったと述べる。例えばグリーンにしても、『狂えるオーランドー』の印刷本が出る 1594 年までに、その劇を海軍大臣一座と女王一座の両方の劇団に売っていたことで非難されていたと Stern は述べる。(243) また俳優エドワード・アレインの手元に残された同じ作品の台本はそれらの印刷本より前のものとされ、その 3 冊は俳優や劇団の事情に応じてどれも少しずつ中身が異なるなど、当時の劇作品は、作家本人も含めていろいろ手を加えていたと考えられる。

Thus, whether actor, prompter, scribe, or even author is the copier of parts, every individual part is mediated by someone who does not automatically have as a goal complete fidelity to a whole play, and whose use of synonyms as well as patterns of scribal punctuation and capitalization and choice of stage-direction will have shaped the scripts he created. (Stern, 245)

以上のように考えれば、グリーンは劇作家としての立場は、周囲との関係において損な役回りという側面もあったかもしれないが、彼自身も改変に無関係ではなかったし、当時の劇上演をめぐる様々なやりとりの中で孤高の人ではいらなかった。それに『冬物語』のような後のロマンティック・コメディの定着につながる大きな牽引役を果たしたという意味では、彼もまた散文作家としてだけではなく一人の劇作家として、時代の求める作風に大きく貢献する仕事をしたと言える。

4. おわりに —『パンドスト王』から『冬物語』へ—グリーンとシェイクスピア—

ハーヴェイはグリーンのことを「惨めな男」(‘miserable man’)と断じ、その埋葬にかかった費用も 6 シリング 4 ペンスであったと紹介しているが、グリーンは作品は困窮を経験することなしには生まれなかったであろう。(Harvey, 8-9) そして『パンドスト王』というあらすじの土台がなければ、シェイクスピアの『冬物語』も生まれなかったに違いない。シェイクスピアにしても、その才能だけが劇作家としての彼を成功させたわけではない。Howard も、そもそも当時のロンドンという都市における「商業劇場の発展がなければシェイクスピアがその才能を発揮できる機会はほとんど訪れなかったであろう」と述べている。(‘However, without a commercial theatre in place, Shakespeare would have had little chance to display his genius.’)(2) また Bruster は、シェイクスピアも、時の劇場の懐具合に応じてその劇形態を変えていく工夫を余儀なくされたとする。(110-11) このように劇作家の仕事は、儲けになる

としても独立して採算を取れるというものではなく、それぞれの状況に応じて立場を変える処世術が求められた。しかしだからこそ彼らは、その結果として当時の劇文化を活性化させる一役を担ったのである。儲けという観点から捉えれば、華やかな成功を収めたとは到底言い難い作家グリーンも、その困窮の最期とは裏腹に、時代の状況を自らの作品に描き出し、同時にその作家稼業を通して後の作家たちの仕事につなげる役割を果たしたという点で、重要な作家と言えるのである。

*本稿は、第60回シェイクスピア学会 セミナー1: 劇作家の仕事 (2022年10月2日 於 甲南大学) において、「グリーンからシェイクスピアへ ―劇作家の困窮と自負―」と題して発表した原稿に加筆・修正を施したものである。

註)

1. ‘Yes, trust them not: for there is an upstart crow beautified with our feathers, that with his *tyger’s head*, wrapt in a *player’s hide*, supposes he is as well able to bombast out a blank verse, as the best of you: and being an absolute *Johannes Factotum*, is in his own conceit the only *Shake-scene* in a country’ (*Greene’s Groats-Worth of Wit*, 40).
2. ‘They argue that among the writers known as “the University Wits” reputation depended on claims of status that, at the same time, denied that same status to others. Greene’s refashioning of his public image follows this logic—he claims recognition in the act of denying it to others—and what they term the “dialectic of celebrity” in Greene’s career has durable, structural effects on the profession of writing in early modern England’ (Melnikoff and Gieskes, 19).
3. ‘He inherited more virtues than vices . . . He had his faults, and thou [Harvey] thy follies! Debt and deadly sin who is not subject to? With any notorious crime I never knew him tainted’ (Brydges, 14).
4. Nashe, 174. 『文なしピアスが悪魔への嘆願』の日本語訳については、北川悌二・多田幸蔵訳を用いた。
5. 『グリーンの一文の知恵』の日本語訳については、多田幸蔵訳 (『パンドスト王 いかさま案内 他』に収録) を用いた。

参考文献

- Barbour, Reid. *Deciphering Elizabethan Fiction*. Newark: University of Delaware Press, 1993.
- Bentley, Gerald Eades. *Profession of Dramatist in Shakespeare’s Time, 1590-1642*. Princeton: Princeton University Press, 1971.
- Brown, Cedric C, and Arthur F. Marotti, eds. *Texts and Cultural Change in Early Modern England*. London: Macmillan Press Ltd, 1997.
- Bruster, Douglas. *Shakespeare and the Question of Culture: Early Modern Literature and the Cultural Turn*. New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Brydges, Egerton K. J. ed. *Greene’s Groats-Worth of Wit; Bought with a Million of Repentance*. Printed at the Private Press of Lee Priory by Johnson and Warwick, 1813. Rpt. Historical Collection from the British Library, n.d. A Preface, Critical &

- Biographical. 1-18.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. III. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- Cox, John D, and David Scott Kastan, eds. *A New History of Early English Drama*. New York: Columbia University Press, 1997.
- Foakes, R. A. ed. *Henslowe's Diary*. 2nd ed. Cambridge: CUP, 2002.
- Gayley, Charles Mills, ed. *Representative English Comedies with Introductory Essays and Notes: An Historical View of Our Earlier Comedy and Other Monographs by Various Writers*. Vol. 1. New York: The Macmillan Company, 1907. Rept. n.d.
- Greene, Robert. *Greene's Groats-Worth of Wit; Bought with a Million of Repentance: Describing the Folly of Youth. The Falsehood of Make-Shift Flatterers, the Misery of the Negligent, and Mischiefs of Deceiving Courtesans*. London: Printed by N. O. for Henry Bell, and Are to be Sold at His Shop in Bethlem, at the Sign of the Sun, 1621. Rpt. Historical Collection from the British Library, n.d. 1-50.
- Greene, Robert. *Pandosto. The Triumph of Time*. 1588. Geoffrey Bullough, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. III. London: Routledge & Kegan Paul, 1975. 156-99.
- Harvey, Gabriel. *Four Letters, and Certain Sonnets*. 1592. Rpt. Miami: HardPress, 2019.
- Hibbard, G. R. ed. *Three Elizabethan Pamphlets*. London: George G. Harrap & Co. Ltd, 1951.
- Hoster, Jay. *Tiger's Heart: What Really Happened in the Groat's-Worth of Wit Contrtroversy of 1592*. Columbus: Ravine Books, 1993.
- Howard, Jean E. *Theater of a City: The Places of London Comedy, 1598-1642*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2007.
- Kinney, Daniel. 'Robert Greene'. *Elizabethan Dramatists*. Ed. Fredson Bowers. *Dictionary of Literary Biography*. Vol. 62. Detroit: Gale Research Company, 1987. 77-93.
- Melnikoff, Kirk, and Edward Gieskes, eds. *Writing Robert Greene: Essays on England's First Notorious Professional Writer*. London: Routledge, 2008.
- Mentz, Steve. *Romance for Sale in Early Modern England: The Rise of Prose Fiction*. London: Routledge, 2006.
- Nashe, Thomas. *Pierce Penillesse His Sypplication to the Divell*. 1592. *The Works of Thomas Nashe*. Ed. Ronald B. Mckerrow. Vol. 1. London: A. H. Bullen, 1904. Rpt. Andesite Press, n.d. 137-245.
- Raymond, Joad. *Pamphlets and Pamphleteering in Early Modern Britain*. Cambridge: CUP, 2003.
- Richardson, R. C. *The Debate on the English Revolution*. London: Methuen & Co Ltd, 1977.
- Shepard, Alexandra. *Accounting for Oneself: Worth, Status, & the Social Order in Early Modern England*. Oxford: OUP, 2015.
- Stern, Tiffany. *Documents of Performance in Early Modern England*. Cambridge: CUP, 2009.
- Thomas, P. G. ed. *Greene's 'Pandosto' or 'Dorastus and Fawnia' Being the Original of Shakeapeare's 'Winter's Tale' Newly Edited by P. G. Thomas*. The Shakespeare Library. Ed. I Gollancz. New York: Duffield Company, 1907. Rpt. Clanberry: Preservation Technologies, 2009.
- Wilson, Katharine. 'Transplanting Lillies'. Kirk Melnikoff and Edward Gieskes eds. *Writing Robert Greene: Essays on England's First Notorious Professional Writer*. London: Routledge, 2008. 189-203.

トマス・ナッシュ『文なしピアスが悪魔への嘆願』北川悌二・多田幸蔵訳（北星堂）1970 年

ロバート・グリーン『ジェームズ四世のロマンス』大井邦雄・冬木ひろみ訳（早稲田大学出版部）1996 年

ロバート・グリーン『バンドスト王 いかさま案内 他』多田幸蔵訳（北星堂）1972 年

大井邦雄 「ロバート・グリーン（一五五八—一五九二）のこと ―一つの始まり、一つの終わり―」（ロバート・グリーン『ジェームズ四世のロマンス』大井邦雄・冬木ひろみ訳、早稲田大学出版部、1996 年）191-237.